

書評

金倉圓照著

印度中世精神史 中

佐々木教悟

一

本書はインド精神の歴史的展開をわかりやすく叙述しようと試みたもので、既刊の「印度古代精神史」(昭和十四年)ならびに「印度中世精神史 上」(昭和二十四年)に続く一連の書物である。しかしながら、本書に収められている研究の内容を一瞥してみるのに、既刊のものがまさしく精神史上の諸問題にまつところから取り組んでいるのに対して、今回のものは若干相異した様相を帯びていることに気がつく。すなわち、本書の前半は、主としてマウリヤ王朝没落以後クシャーナ王朝のカニシュカ王出世ころまでの、インドの政治状況を考察することに紙幅が費され(第一章から第五章まで)、それに東西文化の交流ならびに西洋の影響を蒙つたとみられているインドの科学についての考察が付加されている(第六章から第八章まで)。したがって、前半は、いわば政治史ないし文化史といった性質のものである。そして後半は、もっぱら仏教の教団における結果と分派に関する諸問題の考察にあてられている(第九章から第十三章まで)。これは、いわば一種の狭義のインド仏教史と称して

も差支えないものである。おもうにこのことは、著者が「古代はともかく、中世に於て、印度の歴史は、他の文明諸国のそれに比して、著しく不明の箇所をのこしている。重要な事件の順序すら明確でない場合がある。かような事情の下では、精神史探求の前提として、民族興亡の一般的な事象を明かにするために、多くの努力がささげられねばならなかつた」のであり、さらに「文化史的基盤の理解への探求の歩武を進めねばならなかつた」からである。またここに、仏教の教団における結果と分派に関する問題が取りあげられたのも、「中世精神史」の主要な題材をなすべき部門の一つに、部派仏教の展開がある」となす著者の見解にもとづくものである。

いずれにしても、本書に既刊の上巻と、近い将来に上梓される予定の下巻とを合することにより、著者のインド中世における精神史探求の全貌を窺うことになるのであろう。

二

ジュンガ時代において、われわれがもつとも関心を寄せる事象は、ブジャミトラの破仏とメナンドロスの奉仏とヒンドゥ教の勃興と彫刻をふくむ仏教建造物の出現である。ブジャミトラの破仏に関しては、学界において主として仏教側の資料にもとづいて、すでにいろいろと論ぜられている。著者はかれの仏教迫害の事実を肯定する説のほかに、その反対説のあることを紹介するが、著者自身がいずれの立場をとるのか、その点についてはさだかでない。反対説は註記(三)(五頁)にあげてある以外に、インドでは、一九五三年のインド歴史学会第十六回大会において、Sri Hari Kishore Prasad がとりあげているか

ら、かの地の学界においては相当有力なものとなつてゐることが想像される。しかしながら、かれらがいつてゐるように仏教の伝説自体に矛盾があるとはおもわれぬ。インドのような広大な土地にあつては、一部において破仏の行為が行なわれており、他方において石窟寺院の開鑿が行なわれていたとしても、それはなんら不自然なことではない。ところで、著者はここで K. G. Goswami の説をよりどころとして、サーンチーならびにバールトを中心とする仏教遺跡の文化史的意義を論ずるが、その所論は要を得ており傾聴に値するものである。

インド史上におけるカリンガとアンドラ占める位置については、今日といえども尚充分に明かにされてゐない。パイタンに根拠地をおくシャータヴィハナ西方説は、これまで明確に論じたものではなく、その点では啓発するところが多いが、当然そこで問題となつてくる筈の *Andhrabhritya* についての言及がなされていないのは、いかなる理由によるのであろうか。

西北インドの政治情勢に関連する諸問題のうち、メナンドロス周辺に関する所論には著者独自の鋭利な観察がみられるが、ギリシア人の文化と遺跡については、若干の叙述不足が眼につく。ギリシア人の遺跡としてタクシラがとりあげられるのはもつともなことであるが、その地における建造物の建築様式のみが問題視されるのでなしに、その時代の寺院等の建造物が發揮していたとみられる機能についての考察も必要である。その観点からすれば、ジャンディールがゾロアスター教の寺院であつたことは、サカ族との関連において重要な意味をもつものとおもわれる。しかし著者はそのことに関心をよせていな

い。

サカやバルチャのインド侵入と侵入後におけるその動静とは、かれらのヒンドゥ化ないしは仏教受容の問題をめぐつて、ぜひとも究明せられなくてはならない重要課題である。著者はセイスターンのサカとインダス上流のサカとの関係について、諸学者の説をくわしく紹介する。しかしながら、インダス下流のサカの根拠地であつた *Sakaditya* の果たした役割については、なんの顧慮もなしていない。したがつて、チャイナの資料などがあるにもかかわらず、クシヤハラータやウエスターン・クシヤトラバ系統のサカの動きを跡づけることができないままに終つてゐる。なおサカ族が未開の遊牧民族で芸術的才能を殆どもたず、先住民族なるギリシア人の遺産を利用するだけであつたとするのは、いささか疑問なしとしない。漢書卷九十六西域伝に「其民巧雕文刻鏤治宮室織罽刺文繡」とあるのは、塞種について述べたものである。

クシヤナのカニシュカについては、多くの伝説を整理して、説話と史実との近似点を求めても、なおいくたの矛盾や疑問が残るのが研究の現状であるが、著者は倦むことなく伝説を拾ひあげて、それに対して学問的検討をあたえている。ただしマートリチュータが王に送つた書翰の存在に注意しながら、カニシュカ二世宛のものとなす説の可否には触れず、また王と有部との関係、マートリチュータの主要著作一百五十讃にあらわれたる *Souryana* の思想など、学界において検討すみのものもあるが、それらはすべて省略している。

東西文化の交流と証跡の所論で、もつとも興味のある問題

は、Milindapañha の原形態に関して、ギリシア語の原本があり、その原本にもとづいてインドのテキストができたとする W. W. Tarn の説を紹介し、その説を著者が高く評価しようとする点である。すなわち、かの書の構成に「偽アリストテースの手紙」と類似の仕方がとられてある点に注目し、「ミリンダの間」の成立についてギリシアとインド文化の直接交渉の跡を認めうることになろうとするのである。けれども、ミリンダの問答の相手となつてゐる那先比丘が架空の人物に相違あるまいというのは、水野弘元博士の精緻な研究（「ミリンダ問経類について」駒沢大学研究紀要通巻第十七号）に徴しても、肯くことができない。

ガンダーラの仏教美術ならびにインドの科学についての論述は、きわめて簡潔ではあるが、問題とすべきものはすべて網羅してあり、しかも W. Kiefel のインド地中海文化説といった今後の課題ともなる新学説もとりあげられていて、本書に一種の斬新さを加えている。

三

結集の問題は、經典の成立ということ以外に、部派の分裂という事件と関連して、教団史の上から従来より学者の注目するところとなつてきた。そして今日では、わが国の学者の信頼すべき研究もすでに公にされている。しかしながら、こと結集に関しては、Przyłuski, Frauwallner, André Bercu 等々といった外国の学者の研究に見るべきものが多いのである。そこで著者はこの事実にかんがみ、結集の概観を試みるにあたつても、できうるかぎり諸学者の説を公平に紹介しつつ、王舎城の

結集、毘舍離の結集、南伝の第三結集等についての所論を展開している。その所論の中心は、やはり資料の多い毘舍離結集であるが、平川彰博士の研究（「律藏の研究」六七頁以下）と相俟つて、学界を裨益するところ大なるものがあるといつてよからう。今ここでそれらの点について詳細に論評することはできないが、部派の分裂に関しては、Bhavya の Nikāyabhedha にもとづいて、法阿育の治世に多くの点についての論争があつたのちに教団に分裂が生じ、そのうち僧伽は大眾と上座の二派に分かれたとなし、その分裂を仏滅後一六〇年頃のこととしているのは参考に値いするものである。しかしながら、それは採用するところの仏滅年代の相異によつて、かの分裂がカーラーソカの時代になつたり、ダンマソカの治世になつたりすることは避けられない。

最後に本書全体を通じて、とくに気付くことは、内外の諸学者、とくに外国の諸学者の著作をあまねく渉獵して、その引用紹介がなされていることであり、独断を避けて、できうるかぎり公正妥当な資料の処理を行ない、その判断を読者に任せたとみられるところさえもあることである。いろいろ瑣細な事項について批評がましいことを述べたが、全体の所論から見た場合には、いずれも問題とするに足らないものであらう。インド精神史という、このような広範囲の領野をふくむ研究に取組んで、そのみごとな成果を学界に提供せられた努力に対して深甚の敬意を捧げるものである。

A 5・三十一頁・昭和三十七年七月・

岩波書店発行・定価一、三〇〇円